

て、専門家らしい提案を付けて上司に提出した。私はさすがに専門家らしいレポートだと感心していたが、上司たちにはひどく不評だった。現実があまりにも計画どおりにしていないことがありありと表現されていたからだ。計画と実践のギャップを埋めることの難しさを思い知らされるばかりで、結局私は南スーダンを出るまでそのギャップを埋めることには失敗していた。

私は結果的にこの NGO を辞めることになり、1年の契約を終了する前に、新たにプロジェクト・マネジャーとして着任したスタッフに仕事の引き継ぎを行っていた。新しいプロジェクト・マネジャーはジャーナリス

ティックで記述の多い私のレポートのスタイルを改めて、マイルストーン・チャートという表を埋めていくレポート形式を導入した。レポートにあまり時間を費やす必要がなく、読むほうも一目でプロジェクトの進展状況が分かり、とても便利なシートだった。私は計画と実践のギャップが覆い隠されていくのを懸念しつつ南スーダンを後にして、私の「計画」を仕切りなおすことを考えることにした。しかしその一方で、南スーダンとの縁をこれで終わりにしたくはなかった。日本での「計画」を無事実現したら、私は南スーダンに戻りたいと帰りの飛行機の中で考えていた。

水害とその復興過程からフィリピン社会を考える

福田晋吾*

2009年9月26日、フィリピンの首都マニラを台風16号（フィリピン名：オンドイ）が直撃し、過去最悪の水害をもたらした。特に、私の主調査地であるマリキナ市は、最も被害の大きい地域のひとつとなり、死者は優に100名を超え、行方不明者も多数に上った。自分自身はもちろん、多くの住民にとってもあれほどの洪水は初めてであり、一生忘れることができない苦い経験となった。

被災した人々には大変申し訳ないことに、

私自身は被害から免れた。当時、客員研究員として所属していたフィリピン大学（ケソン市）近辺に住んでおり、そこがたまたま小高い丘になっていて、洪水の水位が最高時でも20センチ程度でとどまったためであり、また当日マリキナに出掛ける予定だったが、急遽取りやめることになったためでもある。

私には、初めてフィリピンに到着してすぐ後の1か月間ホームステイをさせてもらい、その後も何かとお世話になっているマリキナ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

在住のホストファミリーがいる。当日は息子さんの誕生日パーティーに招かれ、昼前に来るよういわれていたが、その朝は一瞬でも外を歩けば濡れになってしまうような大雨であり、電話で雨が弱まるまで待つ旨を伝えた。しかし、午後になっても雨は一向に弱まる気配がなく、マリキナ行きを諦め、断りの電話を入れた。とはいえ、その時点では今日は本当によく降るなあという程度の認識しかなかった。雨季のマニラでは、大雨や洪水など日常茶飯事だからである。ニュースを見ていなかった私は、結局、夜になって、友人から安否を気遣う携帯メールを受け取るまで、マニラが前代未聞の水害に見舞われていることを知らなかったのである。

本当に被害を実感したのは、翌日、雨が上がって、初めて街の様子を直に見た時である。水浸しの家を皆が大掃除しており、自分の居住地域がたまたま被害が少なかったことを初めて知った。そして、マリキナの被害が特に深刻であることが分かり、ホストファミリーの安否が心配になり、慌てて彼らに電話してみたが、繋がらない。彼らばかりか、マリキナのどの友人にも電話が繋がらない。回線が麻痺していたのである。また、マリキナに入る道路も封鎖状態で行くこともできなかった。

2日後、ようやく道路が開通し、一部の携帯電話回線も復旧した。タタイ（お父さん）の携帯電話が運良く繋がり、話げできた。私は、彼らの無事が確認できたことで少し安堵したが、家の1階部分と車が浸水し、食料不足で困っていると聞き、とりあえずホスト

ファミリーを含め、友人たちに米や干物、果物、インスタント食品などの食料を配って回ろうと、近くの市場で大量に買い込んで現地に向かった。

マリキナに入り、街の惨状を見たときの衝撃は、今でも鮮明に覚えている。マリキナ市は、前市長バヤニ・フェルナンド氏と、妻で現市長のマリア氏による都市大改革の成果で、フィリピン随一の綺麗な景観を誇る都市として名声を得ていた。中心部を流れるマリキナ川は、オブジェが浮かび、川岸が芝生で整備され、歩道と自転車道が設置された道路は、ゴミがほとんど落ちておらず、電灯などの公共物も、ピンクと水色の「バヤニカラー」に統一された、整然とした美しい街並みであった。それが一変していたのである。道の両側に大量のゴミの壁が出来、川の氾濫によって堆積した砂が路面を茶色く染め、車が通ったり、風が強くと、ものすごい砂ぼこりが舞い上がった。ストリートチルドレンが大量発生し、渋滞で立ち止まっている車に張りつき、施しを要求していた。やっとの思いで、ホストファミリーの家に着くと、ちょうど掃除をしていたところで、家の中は既にかなり綺麗に拭かれていた。食料を渡すと、喜んでくれて、やっと少しは役に立てたことが嬉しかった。それから、友人たちを訪ねて回った。市場に行くにも泥だらけの道を歩かねばならず、商品も泥水に浸かったひどいものしかなく、そんなものでさえ通常の2倍も3倍もしているとのことで、彼らも大変喜んでくれた。平屋に住んでいたある友人は、当日、胸まで水につかりながら、荷物を

頭の上に載せて、地域で一番高度が高いガソリンスタンドまで避難し、一晚中立ったまま大勢の避難民と水が引くのを待ったそうだ。泳げない人も多く、恐怖で泣き叫ぶ人もいて、皆とにかく命だけはという思いでそこまで歩いたという。

行方不明者も含めると100人以上の死者が出たという、川沿いの低地にあるスラム街を訪問した。マリキナで被害が拡大した最大の理由は、川が氾濫したことにあるが、水没したことが犠牲者拡大の直接的な原因ではない。犠牲者拡大の真の理由は、上流のダムがアナウンスなしに放流され、極めて短時間に川が増水したことによるものであった。経験上の判断から、避難まではせず、自宅に留まった人々が犠牲になったという。ダム自体に決壊の恐れが出て、やむを得ない措置だったのかもしれない。しかし、通知が一切なかったため犠牲になった人々のことを思うと、胸が痛い。災害発生時に人々に即座に重要情報が流される仕組みが機能していれば、悲劇は防げたはずであり、重大な人災といわ

ざるを得ない。また、当然のことかもしれないが、最貧困層が深刻な被害に遭った一方、高級住宅地は概して高台にあたり、地盤がしっかりしており、被害が少なかった。このような危機的状況下ほど、貧富の差が浮き彫りになるものだ実感した。犠牲者に対し、自己責任で不法に居住していたのだから同情の余地はないと見る向きもあるが、家賃支払まで余裕のない貧者がやむを得ず危険な地区に住まざるを得なくなっている状況を放置している行政、ひいては社会のあり方そのものが問われているのだ。



写真2 被災直後、スラム街に出来たゴミの山



写真1 避難場所を求めて逃げる人々
(マリキナ市、2009年9月26日)



写真3 約1ヵ月後の同地点(写真2)の様子
ゴミは取り除かれ、ほぼ元の状態に戻っていた。

地区内の被害は、マリキナのその他の地域にも増して大きかった。しかし、そのような状況下でさえ、被災した人々は、部外者の私に被災場所をただ見に来ていることに怒ることもなく、カメラの撮影も快諾してくれた。また、落ち込むこともなく、時には笑顔で復旧作業に当たっていた。私は、それを見て、住民の逞しさとエネルギーに感心し、同時に、これなら大丈夫だ、すぐに彼らは立ち直ると確信した。

それからしばらく、私は、日本の災害救助関連の NGO で構成される支援団体へ、マリキナの被害状況と支援状況を報告したり、友人や調査先である靴やカバンのメーカーを訪ね、差し入れをしたり、掃除の手伝いをしたりして、1ヵ月ほど過ごし、その間、日に日に復興する様を見ることができた。消防車が道の砂を取り除いて回り、少しずつ綺麗になった範囲が広がっていった。家庭から廃棄に出されたゴミの山も、順々に道から消えていった。集められたゴミは一旦空き地に放置され、しばらくは凄まじい悪臭を放っていたが、街中の道からゴミを回収してからは、空き地の集積ゴミも運び出されるようになった。2週間後には、住民の大半は大掃除を終え、続いて被害が大きかった調査先も掃除を終え、操業を再開した。上述のスラム街も、一部の地域で被災から1ヵ月後もまだ電気が復旧しなかったが、道路は他の地域と同様、砂が取り除かれ、ゴミも消えた。人々は明るさを失わず、街には活気が戻っていた。私は1ヵ月前の確信は間違っていなかったと思った。

順調な復興の一因は、市行政のリーダーシップが発揮され、国内外から多くの支援を獲得したことにあるだろう。政府部門からは、国軍、マニラ開発庁の現場作業員、地方の消防車等が素早く派遣され、民間部門からも、主に国内の経済団体や NGO から、物資を含む支援をいち早く獲得した。これは、バヤニ前市長の高い情報発信力があってこそであろう。また、それらを効率良くコーディネートできたことが、比較的早期の復興に繋がっているのは間違いない。しかし反面、支援の現場では、その分配に公平性を欠いている部分があった。物資配給の情報は、住民に伝わっておらず、たまたま情報を知った者が、市の災害対策事務所で指定された時刻に並び、物資を受け取っていた。しかも、先着順で、一定数渡すと配給は打ち切られた。また、市の責任ではないかもしれないが、電気や水道の復旧日数、道路の砂、ゴミの除去日に大きな地域差があった。また、市民の足であるジプニー（小型の乗合バス）の運行台数が被災後しばらく極端に少ない状態が続いたことに対して、何の対策も取られなかった。その結果、マリキナ市外への交通手段が絶たれ、食糧不足と物価上昇を促す一因となったと考えられる。市行政の復興支援策が、都市の美観やインフラ整備に重点が置かれたことで、住民生活への応急処置的な支援策や支援の公平性への配慮が軽視された面は否めないだろう。とはいえものの、たった1ヵ月で見違えるほどの復興を遂げたのは事実であり、改革によって整備された街並みが、被害を元の状態よりも小さくしていることは明白であ

る。特に、上述のスラム街の川向いの低地には、改革前さらに巨大なスラム街があり、その住民を立ち退かせて、跡地をショッピングモールにしたことが、結果的に潜在的な犠牲者の数を減らすことに繋がったといえる。土地面積の広大さと人口密度を考えれば、100人単位、いや1,000人単位で、犠牲者が未然に防がれたといえよう。改革手法には賛否あるものの、災害対策の面からいえば、バヤニ前市長は先見の明があったと感じた。

さて、ひるがえって、フィリピン全体の今後を考えたとき、今回の水害の経験はどのように活かされるのだろうか。災害時の情報伝達など災害対策は早急にも議論され、実行に移されるべきであるし、その延長線上に、貧困対策にも関心が高まり、新しい社会のあり

方を問うところまで盛り上がれば怪我の功名ともいえる。しかし、マニラ首都圏のある市では、被害の大きかったスラム街で、「安全のため」という大義名分の下、住民が強制退去を命ぜられるという事態が発生している。安全対策そのものの議論が行なわれる前に、これ幸いと貧困層の生活基盤を奪うやり方は卑劣といわざるを得ない。このような強権的で、住民の生活を顧みない行政のやり方が横行するならば、それは国民生活にとって水害そのものよりも大きな脅威となる。地域住民、特に貧困層の生活を考慮に入れ、彼らの活力をむしろ生かすような開発、発展の道こそ、フィリピンが今後議論し、実行していかなければならないものであろう。

コトヌーのバイクタクシー

—ベナンの市民の大切な足—

山瀬靖弘*

私の調査地は、西アフリカのベナン共和国である。「ベナン」という名前を言っても、多くの日本人は知らない。日本人が商用、観光にあまり訪れるわけでもなく、地下資源はごくわずかしか産出されず、内戦があったわけでもない。こういったことから、知名度が

低いのが現状である。だが、「タレントのゾマホンさんの国です」と言うと、「あー、あのテレビに出てた人のところね」となり、一部の人には、多少あやふやな感じもするが、知られているようである。

ベナンは1960年8月1日に、フランスか

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科